

# 禪の友

Zen no Tomo

# 3

March 2020

特集 お彼岸





# ご本山だより 大本山永平寺 【梅花】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

蚕月さんげつの永平寺では、仏殿前の梅花ぼつてんが綻び私たちのところを励ましてくれます。

淡雪煌めく山裾を見下ろす法堂ほつどうでは、観音懺法くわんおんぜんぽうのおつとめが静々と営まれております。

「観音懺法」では、観自在菩薩さまの前で、知らず知らずのうちに犯してしまう罪や過ちをそれぞれに懺悔ざんげいたします。普段私たちは、当たり前前に生活していても、自らの知らないところで、多くの命やまごころに支えられて生きているものです。

さて、永平寺のご開山道元禅師さまは三十四歳のころ、深草に観音導利興聖宝林寺を開かれました。それからしばらくして三月九日に、仏道を歩む者に用心を伝える『学道用心集がくどうしんしゅう』をお示しにされました。その中に次のようなお言葉があります。

「観音、流れをかえ入して所知しよちを亡なす」

観自在菩薩さまは、あつい真心とやわらかなころでもって、救いを求めるものと身心を等しくし、そのものに寄り添い導きます。自他の区別を超えて、向き合うものと一つになろうとするそのお姿は、知らず知らずのうちに自己を中心にしてものごとを受け取ってしまう私たちに、自らを省みる懺悔の大切さをお示しくださっています。

先日上山した新到の雲水方の、白い吐息をあげながら掌を合わせるその姿は、やわらかく謙虚にものごとに向き合う姿勢を教えてくれているようです。「梅は早春を開く」と申します。永平寺の春は、観自在菩薩さまそして新到の雲水方に香るやわらかな姿そのものです。

南無観自在菩薩 南無観自在菩薩





# ご本山だより 大本山總持寺

## 【道を求めて】

—新到上山と祈りの夕べ—

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一

現在、新たな修行僧が続々と上山してきております。

彼らのほとんどは、これまで学生や社会人でしたが、これからは僧堂に起居し修行に専念する生活が始まります。

それには先ず「発菩提心」、すなわち道を求める強い気持ちを発さなければなりません。発菩提心は発心、道心とも言います。

總持寺ご開山瑩山禪師さまは『伝光録』の中で、「第一道心の事を忘れず、一々に心を到らしめ、実を専らにして当世に群せず、進んで古風を学すべし」と示されました。ここで大切なのは「古風を進んで学ぶ」ということです。瑩山禪師さまは更に「古風は金剛よりも堅固なものであり、これを学ぶには相当な覚悟が必要である」とも示されました。

少子化などの影響で近年は修行僧の数が減少気味ですが、多寡に拘わらず、修行道場では発心や道心の堅固さが問われます。

新しい修行僧たちが、瑩山禪師さまのお示しを胸に留めて精進奮起されますよう願ってやみません。

三月八日（日）は東日本大震災復興祈願の「祈りの夕べ」が開催されます。江川禪師さま大導師による慰霊と復興祈願法要の後、祈念コンサートが行われ、犠牲者の冥福と被災地の復興への祈りに包まれます。また、今年は特に秋田県横手市から雪が運ばれて「かまくら」が設営され、万灯供養とともに灯が掲げられます。

十七日（火）から二十三日（月）は春の彼岸会です。毎日施食法要が行われ、二十日には江川禪師さまが大導師を務められます。

選・坊城俊樹

ロダン作考える人日向ぼこ

東京都 野村信廣

評 ロダン作の「考える人」は誰しもが知っている。思案にふける男性の像も誰でも思い浮かべる。しかし、それが日向ぼこをしている姿を想像することはあまりない。この意外性とユーモアに驚く。

星降る夜白馬駆けゆく聖夜かな

大阪府 花谷広文

評 クリスマスの夜には普通サンタがそりに乗ってやって来る。だが、白馬が満天の星が降る夜に飛翔する景色もまた素晴らしい。「星流れ」とすると、秋の季節で一つか二つの流星となるので、絵画的臨場感に欠ける。

◆ 聖夜劇トナカイはあの小児科医 千葉県 甲斐 勇

◆ 銀河系ふくらみ止まぬ秋の潮 千葉県 須見 祥子

◆ 烏瓜夕日と色を競ひをり 三重県 西村 廣視

◆ 翻れば修羅となるなり冬の鳶 福島県 渡辺 正一

◆ 冬の夜の都会はダイヤちりばめて 静岡県 池谷 硬司

◆ ひとつ道違へて出会ふ帰り花 和歌山県 田崎 よし子

◆ 開かれしままの全集日脚伸ぶ 山口県 中井 清子

◆ 余生とは日向ぼこしてゐる如し 山口県 御江 恭子

◆ この年もいつの間にやら冬立ちぬ 福岡県 安部 正和

◆ 散紅葉曲がつた道のクラクション 奈良県 鈴木 重雄

選者吟

鶴舞へる淡海を合はせ鏡とし 俊樹

作句小見 季題は「鶴」で、その優雅な飛翔はまるで、琵琶湖（淡海）の鏡のような水面を合わせ鏡のように見ながら飛んでゆく様を諷詠した。かなり大袈裟だが、俳句とはこんな飛躍も楽しいものである。

選・長澤 ちづ

竹筒に差したる母の鯨尺うらに旧姓うつ  
すら残れり

三重県 西村 廣視

評 作者の母上は和裁をなさっていた方だろう。長年使われて光沢を帯びた鯨尺。そこに嫁がれる前の旧姓を見つけて感慨に浸る作者である。母への深い思いがなければ発見出来なかつたやつと読めるような字。「うつすら」が一首を際立てる。

鬱金色の海と化したり風吹けば小波たち  
ぬ銀杏巨木は

兵庫県 前田 あつ子

評 見事に黄葉した大きな銀杏の樹を、初句と二句目にいきなり「鬱金色の海」と大きく把握して表現する大胆さに驚くとともに、小波の濃やかさも描写して読者を惹きつける。

◆ 納骨時雨降り出して少年が読経の僧に傘差しかける

静岡県 末松 愛正

◆ 露置きに撓う土手草研ぎ立ての録に音よし今朝のはかどり

岩手県 穴戸 さとる

◆ 高齢を理由に指名の役辞せば生さる間口が狭くなりたり

鳥取県 山本 浩一

◆ 吊るさるるいい塩梅の干柿は蔵王おろしの吹くに任せて

宮城県 須藤 智恵子

◆ 朝よりの鷹の渡りの観察を終へて下山す霧包む径

広島県 徳永 進一郎

◆ 集落の十戸に暮らす人よりも猫が数増し日向ぼっこす

福島県 佐藤 忠

◆ 帰る子を駅のホテルに待ち居れば見上ぐる先に冬の満月

鳥取県 眞山 博充

◆ 冬の陽を抱きて咲き散るお茶の木の花殻を手もて根元に寄せぬ

岩手県 阿部 照子

◆ 我が家の階段上下するたびに知らず知らずに数かぞえいる

北海道 吉田 洋子

◆ 救急の講座を受けた帰り道AEDのマーク目に付く

奈良県 鈴木 重雄

選者誌

りんどうのむらさき雨に流れとどく給手紙一枚の叙情  
なれども

ちづ

作歌小見 山本さんの一首の社会との接点を「生さる間口」という把握にも深く青きました。吉田さんの何気ない自身の行動にも普遍性を感じます。ご高齢の方の投稿が多いだけに、一首一首に人生の深さを思わずには居られません。